

家庭科教育内容の構成に関する研究(I)

— 概念アプローチについて —

中 妻 静 子
(広島大学大学院)

I はじめに

現在、家庭科教育の中心課題として内容の精選ということが言われているが、内容選択の原理・方法は明確でなく、また内容構成に関しても説得力のある理論は打ち出されていないという現状である。(①) それ故、これらに関する理論的・実証的研究が緊急に要請されるが、本研究はその一端に位置づくものである。これを始めるにあたっては、まず、「概念アプローチ」により内容の精選構造化を図ったといわれる1960年代のアメリカ中等学校家庭科カリキュラム改革作業に着目したい。アメリカの家庭科カリキュラム改革に関しては若干の紹介がなされているが、内容選択・構成の原理・方法の明確化という目的から改革をとりあげた研究は見つけられないようである。そこで、本研究第1報では、この目的を達成するための第1段階として、改革の眼目である「概念アプローチ」に焦点をあて、その性格・方法・有効性を明らかにし、合わせて今後の研究課題を明確にしたい。

II 概念アプローチの性格

(I) 概念アプローチが必然とされた背景

1950年代後半から1960年代半ばは、アメリカ教育界にとって激動の時期であったが、家庭科教育に於いてもそれは例外ではなかった。

(1)社会的・技術的・経済的变化、(2)新しい知識の蓄積(3)家政学の各領域間及び各教育レベル間の連絡の必要性、(4)家政学の領域構造決定の重要性、(5)1959年の中等学校における家庭科教育に関する国家研究、(6)児童青少年に関するホワイトハウス会議(1960年)、は従来の家庭科教育に対する批判的視点となった。(②-34~35) これらの観点からの批判は、カリキュラム上の複雑な諸問題を一挙に解決できる新しい理論と国家的規模のカリキュラム開発組織の必要性を家庭科教育界に認識させた。概念アプローチ方式はこの新しい理論として脚光をあびたものであり、それによる中等学校家庭科カリキュラム研究は連邦教育局家庭科部門と各大学を主体とする国家的プロジェクトの中で萌芽し発

展していった。

(II) 概念アプローチの性格

国家レベルでの中等学校家庭科カリキュラム開発作業は、1961年2月のワシントン会議に於いて実質的に始まったが、この会議では、「基本的概念や一般化の決定が家庭科の各領域の内容に構造を与える」(③-19)ということに参加者の意見の一致をみた。同年7月、家政学の体系化を図るためフレンチリックで開催されたセミナーに於いては、家政学の重要な教育的内容の確立・組織化・統合を可能にし、同時に諸種の教育レベルにおける複雑な教育的問題を考究しうる方法として概念アプローチが認識された。(④-102) この二つの会議はその後のカリキュラム研究の方向を決定したものであり、以後、国家的な努力は家政学の構造決定の手段及び効果的な教授の手段として概念を利用することに向けられたといわれている。(③-5)

しかしながら、国家的プロジェクトの最終的な成果である1967年出版の報告書「概念と一般化：その中等学校家庭科カリキュラム開発における位置」の内容を見ると、確かに、家政学の五つの領域((1)人間発達と家族、(2)家庭経営と家庭経済、(3)食物と栄養、(4)織物と被服、(5)住居)が確立され、それらは三つの主要概念((1)価値、(2)人間発達と人間関係、(3)経営)で統合され、それぞれ概念と一般化で組織化されているが、効果的な教授の手段としての概念開発は各々の教師・カリキュラム計画者の責任であるとされ、この報告書はそれに対する示唆を与えるにすぎないということがわかる。(③-57~58)

一方、当時在野では、家政学・家庭科教育にかかわる研究者が次第に概念の決定や開発に関心をもち、また、概念的理解をめざした教授過程の研究にも関心を向けはじめた。(⑤-89) このことにより、概念アプローチは、領域構造決定の機能から概念構造理解の機能へと機能的に広がりを見せることになった。

III 概念アプローチの方法

概念アプローチの方法については、先の機能の広が

りに対応し、二区分して考えたい。

(I) 各学問領域に於ける構造決定の方法

既述したように、国家的プロジェクトの概念アプローチは概念と一般化による家政学の構造決定を旨としたものであった。しかし、その際の方法は、1967年の報告書からは具体的に見出すことができない。そこで、このプロジェクトの中心的活動であるワークショップを追跡することにより決定の方法を探索しようと試みた。(1)住居設備部会では、概念決定の第1段階として大学教官の意見聴取を行なっている。(⑤-39~42)

(2)家庭経営部会では、専門家が概念枠を提案し、それに対する家政学・家庭科教育関係者の討論がくり返し行なわれた。(⑦-335~339)

(3)被服部会の場合は、次のような方法をとっている。まず、織物・被服学の基本的概念については既にフレンチリックセミナー以前に単独に集団討議が行なわれていたから、同セミナーの小会議に於いてはこれらの討議のレポートに基づいて、不完全ながら概念モデル試案が作成された。続いて開かれたミシガン州立大での会議(1962年3月)に於いては、基本的概念の決定に対する視点の転換がいわれた。即ち、概念決定に際しては、まず、概念決定の作業手順の開発が行なわれなければならないということで、次の手順が開発され、それに従って作業が進められた。(a)被服学の教育にとって現在最も中心となる領域を決定した。(b)それらの領域の概念的構造決定のために「機能的な問題」を見出した。(c)領域間の関係、各々の領域に含まれる要素間の関係を記述した。また別の作業方法として、論文から基本的概念を抽出する試みが1962年11月の東部地区織物・被服学大学教官会議においてなされた。被服部会では、このようなプロセス毎に、漸時、基本的概念が決定されていった。(⑧-342~343)

以上、各部会のアプローチからわかることは、概念決定の方法に決して一定したものがあった訳ではないということである。即ち、関係者の意見聴取、専門家の提案の吟味、最近の論文・研究の検討などを行ない討議し合うなかで、その領域独自の方法が開発され、試行錯誤的に概念が決定されていったと推察できる。各部会の方法はいずれも注目し値するが、資料の性格上、詳細の追求は不可能であり、今後の研究に委ねなければならない。なお、この各学問領域の構造決定の方法に関しては、次の教授過程と関連し学習者の認識段階を含んだ概念決定の方法の中で、ある程度補足できると思われる。

(II) 教授過程と関連し学習者の認識段階を含んだ概念決定の方法

ここでは、Byrd, F. M. の研究「児童発達学に於

ける概念アプローチの実施」(⑨)に注目したい。

バイヤードは適切な教育内容決定の方法として、

(1)一定のカリキュラムから旧式の題材を削除するか、(2)一定の領域の基本的概念を引き出すか、の二者択一があるといっている。(⑨-107)そして後者の立場から、(a)児童発達学における基本的概念の示唆的なリストの開発、(b)教授に適用され、理解のレベルに関連した児童発達学の概念の開発、(c)このアプローチの中で使われる認識内容の性格についての示唆、という三つを目的とし、中等教育段階の児童発達学の内容を決定しようと試みている。以下、この研究のプロセスを追うことから、教授過程と関連した概念決定の一つの方法を明らかにしたい。

まず、バイヤードはドレッセル(Dressel, P. L.)の概念の型を解釈することから、「児童発達学における基本的概念は、幼い子どもの行動や発達に関する理解をなすために、本質的と思われ、鍵となる、中心的な観念である」(⑨-107)と定義している。

そして、児童の行動・発達理解のために基本的であると認められる概念のリストを引き出すにあたっては、次の手順をとっている。

手順1: 児童発達学における強調点を決定し、含まれる概念という点から学習領域を示唆するために、数州のカリキュラム資料のスコープとシーケンスを吟味した。手順2: ダウエの論文(Dawe, H. C., Teaching Child Development, Journal of Home Economics, 1958, Vol. 50)の中で作成されていた概念を検討した。手順3: レイの研究(Ray, E., Teaching Child Development, DHE Topic Number 18, 1962)から児童の行動についての二つの概念を引き出した。

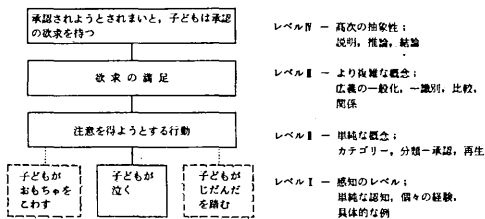
以上三つの手順により八つの概念が導き出されたが、しかしこれらには、生徒が児童の行動や発達について低次から高次の理解へと進めるような認識内容に関して、何らの定義も含まれていないのである。そこで、バイヤードはこの問題を解決するために、17大学の児童発達学のテキストを分析し、ドレッセルの概念分類表(Home Economics Seminar, French Lick, 1961, p.16)に基づいて、12の概念を引き出した。これが第4の手順である。第5の手順として、それらの各概念と関連している認識内容を構造化するためにタイラーの図式(Tyler, R. Basic Principles of Curriculum and Instruction, 1950, pp.56-62)に基づいて下位概念を作成した。以上により導びかれた概念は(表1)の如くである。しかしこのようにして作成されたリストも、生徒が児童の行動や発達をより理解するための概念枠の構成の一つの手段にすぎないということである。

表1 手順1～5の児童発達学の概念(㊟-107-108)

手順	決定された概念
1	人間の基本的欲求、遺伝、環境、成長と発達
2	レディネス、行動様式、成長と発達、基本的欲求
3	パーソナリティ、個人発
1, 2, 3より	遺伝、環境、基本的欲求、成長と発達、パーソナリティ、行動様式、個人発、レディネス (計 8)
4	成長と発達、個人発、正常、レディネス、成熟、学習、遺伝、環境、基本的欲求、行動様式、社会化、パーソナリティ (計 12)
5	例：基本的欲求 7.1 すべての個人は、満足させようとする基本的欲求を持っている

従ってパイヤードは、概念リストの完成よりもむしろ、それが教授にどの程度機能的なアプローチを与えるかということの問題にした。そこで、ブラッドフィールド (Bradfield, J. M.) ・マードック (Mordock, H. S.) らの仮説“認識達成のための理解のレベル”ということについて検討し、「理解のレベルと概念達成は相互に関連しあい、同じプロセスの部分として見なさなければならない」(㊟-109)と考へ、これを図式化した。(表2 参照)

表2 「承認の欲求」の概念達成の図式(㊟-108)



上の図式を説明すると、まず生徒は、レベルⅠにおいて児童の行動の具体例を多く観察し、子どもが泣くのは周囲の注意を得るためであるということを知り、これを認識する。レベルⅡにおいては、レベルⅠにおける認知経験に加えて単純な概念達成を容易にする経験を得、レベルⅢでは、欲求の満足という更に複雑な概念を反映した経験を得る。最後にレベルⅣにおいては、先の三つのレベルで得た経験に加えて、承認の欲求という結論を形成する経験を得る。この図式は概念達成の中に含まれた認識過程を示唆しつつ、思考過程にある知見を与えるものであり、パイヤードの概念決定方法の眼目である。

最後にパイヤードは、児童発達学の認識内容の性格について五点にわたり述べているが、その強調点は、生徒の理解段階に従った順次的な内容ということにおかれている。(㊟-110)

以上に述べたパイヤードの方法は、生徒の概念理解や思考能力の発達を目標とした概念アプローチの方法であり、単に学問領域の構造決定を目標としたものでないというところは大いに評価できる。またその方法自体も論理的である。しかし大きな問題の一つは、概念化の段階がどんな場合も明確に分けられ、識別され得るだろうかということである。教育内容を認識の順

次に従って構成する際の大きな困難点はまさにそこにあると思われる。

Ⅳ おわりに

家政学における基本的概念の決定とそれらが得られた過程の理解は、分野の知的な面を体系的論理的に教えることを可能にすると言われている(㊟-88) また本質的に概念教授は、学習の転移を容易にし、批判的思考力を発達させるための筋道を与え、知識のシステムを与えるときとされている。(㊟-779) そして、実際に概念アプローチによる授業は、適切な指導方法の選択などの要素を加えると、相当な成果をあげたことが報告されている。(㊟-17-19) 今後の第一の課題は、今回の研究をふまえ、概念アプローチ方式で開発されたカリキュラムを検討し、その構成原理・方法を更に明確にすることにある。

引用文献

- ① 拙稿、家庭科教育内容の精選に関する研究、修論
2. Mallory, B.; *Home Economics Curriculum Study*, American Vocational Journal, 1963.
3. Report of National Project; *Concepts and Generalization*, American Home Economics Association, 1967.
- ④ 今月光映編、家政学教育の発展、ミネルバ、1972.
5. Hoover, H. M.; *Bloom's Cognitive Processes Applied to College Students' Levels of Conceptual Understanding*, Journal of Home Economics, Vol.59, No.2, 1967.
6. Esteros, G.; *Basic Concepts in Home Furnishings*, J. of H. E., Vol.55, No.5, 1963.
7. Knoll, M. M.; *Toward a Conceptual Framework in home management*, ib..
8. Wines, M. E.; *Progress Report on Concepts for Teaching of Clothing*, ib..
9. Byrd, F. M.; *Implementing the Concept Approach in Teaching Child Development at the Secondary Level*, J. of H. E., Vol.58, Feb., 1966.
10. Tinsley, W. V.; *Teaching Intellectual Aspect of H. E.*, J. of H. E., Vol.59, 1967.
11. Hoover, H. M.; *The Concept Approach to teaching family relationships*, J. of H. E., Vol.59, No.10, 1967.
12. Westlake, H. G.; *Teaching for Concepts and Generalizations in H. E. Education*, A. V. J., Dec., 1964.